子どもに焦点をあてた災害看護研究について

竹　村　眞　理

Disaster nursing research focused on children

TAKEMURA Mari

抄　録

被災した子ども支援に対する現在の動向を明らかにすることを目的に文献検討を行った。東日本大震災後より、災害対策に対する具体的な活動が加速していることが明らかになった。その反面、文献上で、長期的な支援の必要な子どもの心のケアを取り上げたものは少なかった。今後は、会議録・解説、実践報告等をさらに分析し、心のケアの実態並びに課題を抽出するとともに、日ごろから子どもの強さを引き出すかかわりが必要であると思われる。

キーワード：災害看護
小児
小児のこころのケア
災害パッケージの活用

はじめに

災害看護支援ナースの組織化と活動は、阪神・淡路大震災（1995年）の時に、日本看護協会が防災ネットワークを創り全国的に看護職を組織して救援活動にあたったことがきっかけになっている。阪神・淡路大震災以降、新潟県中越地震、能登半島地震、新潟県中越沖地震があり、2011年の東日本大震災時では約1,000人近い看護師が災害活動に携わった[1)]。一連の度重なる災害の中で、災害弱者といわれているCWAP（子ども、妊娠中や育児中の女性、老人、貧困・病人・障害者・外国人）へのケアが重点課題となっている。子どもについては、こころのケアを活動している現地の医師・ボランティアから2011年災害後も都心において度重なる報告があった。子どもは、生理学的体の特徴と認知発達の特徴から、環境の影響を顕著にうけながら成長し発達する存在である。災害によって変化した周囲の環境と折り合いをつけながら成長し発達する過程が、子どもの心身の健康を左右し人格形成にも影響する。このため被災後の子どものケアは、特に被災時のケアのみならず、被災時の子どもの年齢や環境の変化に応じて長期にわたり必要であると考える。

そこで、被災した子ども支援に対する現在の研究の動向を明らかにすることを目的に文献検討を行ったので報告する。

方　法

1．文献研究

2．「災害看護」「小児」をキーワードに医学中央雑誌で検索した結果、過去10年間で167件が該当した。これを対象年齢、災害の種類、研究概要で分類した。

結　果

1．文献の種別と数：文献の過半数は、実態調査、報告であった。

種別	数
一般	5
会議録	44
解説	27
原著	28

2．災害の種類

2011年の東日本大震災を取り上げた文献が多くみられ、その内訳は阪神淡路大震災、中越および中越沖地震、能登半島沖地震などの津波・地震災害が主であり、火山噴火、東海豪雨は数件であった。

3．研究対象

子どもを対象者にしておらず、看護学生や災害支援にかかわった看護師、保健師の報告を研究の対象としていた。

対象者	数
看護師	21
子ども	20
看護学生	7
障害児	9
新生児	6
保健師	3
在宅	3
その他	96

研究対象その他は、小児病棟、専門病院の防災体制や、防災パッケージの効果などであった。

4．研究概要

＜災害の意識・認識について＞	＜実践活動報告＞
NICU の看護師の意識改革 看護師の災害に対する意識調査 家族の意識 看護師の意識調査 災害看護に対する認識 男子学生の意識調査 乳幼児の看護師の防災意識 母性・小児病棟の看護師の防災意識 未熟児室の意識調査 障害児病棟の看護師の意識 小児専門病院の災害対策意識	あるもので工夫するしかなかった東日本大震災支援の実際 岩手県の新生児医療 岩手山噴火災害に対する児童の不安内容 元気を取りもどる楽習会 減災を目指した沖縄の台風対策 子ども・家族の抱える問題 こどもの成長発達を長期的に見守るために東日本大震災こころのケア支援活動報告 災害支援体験 災害時の小児病棟の実態 災害時のリーダーシップ 施設の災害対策 障害児家族の被災の実態 震災時の心理的影響 心理的影響のサポート状況　看護師の声 大切な人の喪失体験に対するサポート 東日本災害支援ボランティア活動報告 東日本災害支援ボランティア活動報告 東日本被災地のこどもの支援からわかること 被災した子どもの健康ニーズ　看護師の語り 被災時の幼児・学童の心のケア　養護教諭 被災者の特性を踏まえた教授内容の検討 被災者へのこころのケアを中心に 被災地での活動 ピナツボ噴火災害 9 年後の保健調査報告 避難所のケア 病棟の避難状況と看護活動
＜災害対策＞ 安全管理具体策 医療ケアが必要な子どもの在宅生活での災害への備え 医療的ケアの費用な子どもの支援 机上シュミレーションの効果 ケアパッケージの導入 継続看護のための看護要約作成による申し送りの検討 災害訓練の小児用トリアージ表作成 災害時の心のケアを体験して 災害時の子どもの心理反応、こころのケア 4 原則 災害時の小児救急対応 災害時避難用具レスキューママの開発 災害時マニュアルの見直し 災害弱者についての授業展開と学習ニーズ	

＜今後の対策・体制＞	＜被災後のケア＞
災害に強い街つくりプロジェクト 災害に強いまちづくりプロジェクト 災害によって影響を受けた子どもの生活と健康へのケア 災害発生時の課題・方策の検討　看護師の聞き取り 在宅医療機器装着児の個別プラン作成に係る保健師役割 在宅支援者用パッケージの活用 手術室の避難訓練 シュミレーション教育後の評価 シュミレーションによる避難対策 障害児セルフケアパッケージの検討 障害児用ツール開発 小児在宅用ケアパッケージ 小児専門病院ケアパッケージの活用 小児病棟ケアパッケージ 小児病棟用ケアパッケージの効果 小児病棟用パッケージ導入前後の比較 小児病棟用パッケージを取り入れた防災訓練を実施して セルフケアパッケージでの介入効果 セルフケアパッケージの開発 大学病院における小児ケアパッケージの活用 机上のシュミレーション 特別支援学校用災害シュミレーションパッケージの開発 米国での医療を必要とする子どもの災害対策 米国における災害対策システム 防災対策シュミレーション 防災の取り組み	学生の子どもと家族に対する学び 学生ボランティアの気持ち 学童期遺児のピアサポート 看護学生の支援体験 集団隔離、隔離経験の心的影響とケア 震災５年目の妊産褥婦、乳幼児の健康状態 中長期に支援を必要とする PTSD 発達段階別の心理的特徴 法解釈看護教育 幼児・学童の心のケア ＜その他＞ 看護師としての体験と想い 看護師の保健活動 看護者のおこなう心のケア 心のケアチームとの連携 小児看護学のテキスト内容の検討

考　察

私たちは阪神淡路大震災からわずか10年余で東日本大震災にみまわれた。このためか文献の種類は、実態報告や検討段階のものが多く見られた。子どもへのかかわりに特化したものは少なく、支援した看護学生の目を通して得られる実態を報告している。

看護学生の支援活動の成果から、災害看護の教育について検討している文献が数件みられた。また、在宅で生活する障害児や、医療的ケアを必要とする在宅療養を要する子どもについて検討している文献も数件みられた。今後、これらの報告事項を検討し、課題を明確にする必要があると思われる。

災害対策に向けての災害パッケージの活用の検討が、子どもの生活・療養する場で検討されている。この対策が、災害防止対策への認識の深まりを推進するとともに実用化

されていくことが今後の課題であると考える。

子どもは、環境との相互作用によって成長発達していく存在であると言われている。子どもの特徴は、生理的からだの特徴と認知発達の特徴に分けると次のようになる。

子どもの生理的からだの特徴：子どもの発達特性である脆弱性から、災害時の環境の悪化の影響を直接的に受けやすい。体格や移動運動の発達レベルによっては目線の低い位置に生活している可能性があり、通常の大人の目線では気づかない危険にさらされている。体温調節能力、循環機能は、小さければ小さいほど環境の影響を受けやすい。

認知発達の特徴：子どもの身体機能は子どもが周りの状況をどのように捉え受け止めるかによって変調をきたしやすい。大人に対することばによる伝達能力が充分ではないため、伝えきれないことに対して駄々をこねる、泣く等によってフラストレーションを解消しようとする。乳幼児は感覚・運動を通して環境を認知する為大人の話し言葉等を抽象的な理解ではなく、人がしゃべる時の表情・音の高低を全体的に把握し、その意味を感覚的に捉える。子どもは、周りの世界を理解する能力は高いが、誤解をすることも多い。

以上のような特徴から、災害は、大いに子どもをとり囲む環境を変え、災害という子どもにとって理解不能な現象と同時に周りにいる大人の普段とは違う行動反応に大きな影響を与える。これに伴い子どもはこころのよりどころ「こころの基地」としていた大人の安定が失われるほどの脅威が起こっていると感じ取っている。

２件の文献ではある。「災害に強いまちづくりプロジェクト」が報告されていた。
また米国の子どもの災害支援対策には、日ごろから自分への肯定感をもち、自分のできることに対して大人からの承認を受けていることなどが、災害時の子どもの強さにつながるとの意見が出されている。子どもは脆弱さとともに強固な面を持っているともいえる。今後はさらに被災した子どもとのかかわりとともに平常時の子どもとのかかわりも検討していく必要があるのではないかと思われる。

〈引用文献〉

１）小原真理子・酒井明子監修：災害看護改定２版　南山堂　2012　p12-13

２）同上 p213－214

Abstract

The study is aimed to clarify the research trend in supporting children who suffered from disasters by reviewing existing studies. It was found that concrete activities for disaster measures are accelerated after the Great East Japan Earthquake. However, a few focused on long-term psychological care support for children. Further investigation on available documents such as conference recordings, handbooks, and case reports, is needed to identify current practice and related issues. Moreover, considering ways to promote children's empowerment is one of great importance.

Key words : Disaster nursing
Children
Psychological care for children
Utilization of Disaster Package